清涼寺縁起
五軸画圖詞
全

水

ハ4
4269

門 11 4
號 4269
卷

外篇裡

元圀古法眼元信四五卷 別筆

元書 定法寺公助僧正一全部詞筆

小野忠寶撰誌

古筆了仲書誌之

42- 2959

清涼寺緣起

大日本國山城州洛濱五臺山清涼教寺ノ本尊釋迦如來栴檀瑞像ノ由來ヲ考ルニ夫レ釋尊三大阿僧祇劫ヲ用テ菩薩ノ修行圓滿シテ迦葉佛ノ一生補處ヨリ兜率ノ内院ニ生ジ給ヒ護明菩薩ト申奉リキ是ヨリ八相ノ第一生天ヨリ相ナリ抑之世尊佛出世ノ時ヨリ八ヲ以テ示現生天下天說胎出胎出家降魔成道轉法輪入涅槃也釋院下生ハ西ノ浄飯王ノ家ニ生レ給フ天子ヨリ生ヲ轉シ

位を捨て生を成道し説法利生を垂し
同住ふ事て四恩を報し三有を度し
後雪山薩埵摩訶薩と下生し大光明と放て十方を照し
神は母摩耶夫人の胎内ふ託宿是を第二下天託胎の
相といふ時に都率天より諸の天子おの〳〵我等又同く生まれて菩薩に
仕へ奉らんと願ひ乃至四王天迄
諸共に眷属と共に下生す数量ふくすへからさる
周胎十六年甲寅四月八日朝日出時菩提正覚園中

にをひて夫人右の手を挙て無憂樹の花を折
玉胎の相や玉ふ菩薩右の脇より出生し給ふ第三
七日に摩訶摩耶夫人逝去ありて忉利天に
おゐて天子十方にをのく〳〵引事一七日右の行
をおくる天ばかりにて法のごとくを把とゞめて
天上天下唯我獨尊と唱へ帝釈も宝蓋さし
梵王も白拂をかざし左右ふ侍ふ難陀跋難陀
の二龍王も清浄の水を吐一滴一涼もけて左右
より浴し奉て身黄金の如くみがゝれて三十二相ありて大

光明を放て雷を三千界と照す。天龍八部一宮中一
にして天も伎樂を奏し。ぬちの番花と降して
賢數ふるに暇なし。時に釋姉妹之同し一日に五百乃
男子を生ず。周年に八萬四千を長ずるあり。未
男子を生ず。王妃摩耶夫人属又五百の子と生ず。時
宮中にうへ五百乃伏藏月出て涌出をし一ツの伏藏
七寶も發て見ゑ圍遶をり。八國を諸王も
亦同日に太子を生しまして名歎ゑ。行始事
うゑしらずを。太子十五歳の時春宮に

立給ふ次。二月初八日也。佛盖を指。香花と散し
諸ゑ伎樂を奏しまして七寶の車と設て。實に望太子
を仕ふ備ふり行。尓時靈空に天龍夜叉人非人等
天も伎樂を發し。周音に讃しまして曰。善哉善哉迦
毘羅國王を。いて太子を立給ふ時。八ヶ國
乃王子に亦同日に太子に立給ふ。因果經に見ゑ
ふうと。十七歳乃時大王諸臣と召てのを給ふく。太子
ニ。長大坊中。端正也女人と尋て妃宮に立給ふ。
群卿五ゑ奏しまして言。摩訶那摩の那耶輸陀

の報を伝えとぶく利○西時左子宮中を出給りて。
東門の外の園ふりて病人救ひ行ぬ又翌日西門
にて病人救ひ行ぬ又翌日南門
辻辻浄土の中一ふ法施を施し給ふ是皆浄花天の化作
や又一日城のむつふ御門の時浄花天此五中を化をたす
而後ふく御も是行人をや若て言報も是比丘や世間い
未云常ふ帰りを我学ふ寸ふ事所在通ふして
五欲ふ云を次ふ永ふく生死ふ輪廻の業よふと
是言と化已て虚空ふ上て去ぬをすと乙行ひふく志意

尼女ふ務をうふ給て園舎て昔勅使を
もりて妃女と太子の后妃ふ侍ふ奉ふ長を勅
定とう家をふ吉日ふ択て車と牽ふ事多
牽也遂ふ王宮ふ入ふく后妃の住ふ所ふ至ふ妃
宮ふ更ふ王侍の仕ふ奉ふ妃
大善権権ふ示行う所ふ至ふ菩薩も而事ふ所ふ至ふ
行ふや菩薩も歌ふ供ふ人ふ数と慣ふ事
と浮世ふ事ふうたふれり。荘厳屋ふ父母交舎ふて
生ふするふ事ふ愛没化生ふ只ふ菩薩ふ事願

よ叫ん（ひ）我當る攻（せめ）ん（ん）て（て）法通と学ま（ま）（ん）（ん）（ん）
思相（ひ）（ん）て（て）出家ま（ま）（ん）我国（ひ）（ん）（ん）（ん

四天王等共に諸天を率ゐて四方より来り
供養し奉る。帝釋も亦た衆天を率ゐて
其の月数を算へ来りて告げ
三中旬を過ぎよ。法天世尊に
不見。是則ち衆の相ある初也。（出王宮之圖　第一卷）

老子既に跋伽仙人を告げ林中より馬より
下りて杖を捨て法衣を着し
剣を執て鬚髪を剃り行き車匿大に哭き

悩渇を除て涙を流す。善く主父に
勉めよ。衆苦解脱を得ん事を。
復た来り報ぜんと言ひ
の形状を告げて去る。老子
等苦行未だ幸甚の果報を求めず。仙
人曰く是の如き事を為すと。老子
聞き已て更に出離の
を行ふ事多く歳を経て
我等ふ生死を断ち

第圓滿之圖

…て法の為に身命を惜まず過去を現…て。
普賢菩薩と圍繞…法身を習んと志てまみ
ゆ。或は四方の煙とさとくく、煽を…山谷を
震動…ゆくとも普賢これを見給ふ事重ね
て…ゆくとも普賢菩薩の方をかくのたよ花力
と叫べども普賢菩薩を射矢も紀蓮華となつく
莊嚴の一もとも動す事あるまじ。魔王
ゆもく…恐ろ時よ空中…神ありて名

て奥等をゆ…ゆく魔宮殿
心をたもし…横ふ悪心と生次自疲労して退
も…ゆく吹ふ…ゆめゆ…ゆ。
を吹伏ふも…ゆ普賢の歴劫を修行
善果浄智恵光等を増ふ…ゆ。
面覚を成して一切衆生を導…ゆ…ゆ。
ゆ去ゆ…ゆ仏の金剛座より解ゆ…ゆ
時ゆ…ゆ…ゆ…ゆ…ゆ
ゆく…ゆ…ゆ…ゆ…ゆ…ゆ

いわ空中にお拝を以て時に普賢の化身と顕れ
山をこえくなりうなる口を奉て魔を化して嫌悪を
生ず。陽愕を離れて安穏なり。呂布宮よ悩を除き群魔去り
ぬ。すてよ悪魔退散と唱ふべし。すてよ悪魔退散と唱ふべし
て動を次第天空中にうち雨花を降し
玉楽を奏して世界一切皆悉く平安ならん事を
時雷霆大悟して道を得て散

正覚を成ず。仏の十八法を以て十神力四無所
畏五道の間ふあり乳死此生彼因果を明かに観察
行もて摘し明鏡の中おいて自面像を見
うもうし。是ぞ成道なり相也。此日浄飯王の
子阿難尊者これ大
王をすまし正覚を成すを聞き大
陰時に白飯王男を生すの事を聞き参次一同忻
然として祝をなして
第七転法輪の相なり。凡法成就して衆生を度し

給ふ如来出世は大事也 志ふかき衆生の根機ふ
判給ふ故なり八萬四千にあらわす 是
故ふ頓漸と云て八萬四千の法門諸経事〻
小乗〻て薬草ありたとうもろ〻〻 大一代五十
年三百餘会は親ら如来の所説名別也
志ふ〻〻天台の心ふよれは四教五時と出す 初
華厳の時は七處八会にして大乗の機のみ
別圓頓大の法とそ次は阿含の時は但是ふ
鹿野苑中にて〻十二年ほ同四阿含

但三蔵の教を説て小乗の機とを益次第三方等
時者ふよ説時とよて也大乗の機とを
摂阿とよ第四般若時とよて也大乗の同四教十古説
二乗とを機とうへ大乗の機とを引入給第
五時者法華涅槃の同醍醐味とへ今とは法華八九ケ
年之間二處三會の說前十四品とは迹門是三顕一ふ
義とよ〻〻 法実相の理とは三周挿聞の
益とは法譬喩因縁の說とは三周挿聞の
未成佛の記とを授く 後十四品とは本門寿量通

成佛已來。甚大久遠。壽命無量阿僧祇劫。常住不滅。
諸善男子。如來所成阿耨多羅三藐三菩提。於如是等
法。不說方便。但說無上。正使宣說。久遠若斯。而引導
衆生。令入佛慧。未曾虛妄。所以者何。如來如實知見三
界之相。無有生死。若退若出。亦無在世及滅度者。非實
非虛。非如非異。非三界見於三界如斯之事。如來明見
無有錯謬。以諸衆生。種種性種種欲種種行種種憶想
分別。欲令於諸善根生故。以若干種。因緣譬喻言辭。
方便隨宜說法。所作佛事。未曾暫廢。如是我成佛已來。
甚大久遠。壽命無量。阿僧祇劫。常住不滅。諸善男子。我
本行菩薩道所成壽命。今猶未盡。復倍上數。然今非實
滅度。而便唱言。當取滅度。如來以此方便教化衆生。所
以者何。若佛久住於世。薄德之人。不種善本。貧窮下賤。
貪著五欲。入於憶想妄見網中。若見如來常在不滅。便
生放逸而懷懈怠。不能於此生厭患心。不樂見佛。心不
恭敬。是故如來。知見是已。以方便力。而說是法。比丘當
知。諸佛出世。如優曇鉢華。或時一現。汝等雖復說言。佛
出世。亦復值遇。亦復親近。而於我身。生難遭想。汝等
此事。應生解了。諸佛如來。無虛妄法。譬如良醫。智慧
聰達。明練方藥。所治衆病。或多或少。其人有子。若十
若二十乃至百數。以他事故。遠至餘國。諸子飲他人毒
藥。藥發悶亂。宛轉地上。是時父還來歸家。諸子飲毒。
或失本心。或不失者。遙見其父。皆大歡喜。拜跪問訊。善
安穩還。我愚癡。誤飲毒藥。願見救療。更賜壽命。父見子
苦。依諸經方。求好藥草。色香美味。皆悉具足。搗篩和
合。與子令服。而作是言。此大良藥。色香美味。皆悉具
足。汝等可服。速除苦惱。無復衆患。其諸子中。不失心
者。見父雖喜。與藥令服。而不肯服。所以者何。毒氣深
入。失本心故。於藥雖美。而謂不美。父作是念。此子可
愍。毒所惱故。皆令失心。於此好藥。而不肯服。我今當
設方便令服此藥。即作是言。汝等當知。我今衰老。死時
已至。是藥今留在此。汝等可取。勿憂不服。作是教已。復
到他國。遣使還告。汝父已死。是時諸子。聞父背捨。自
惟孤露。永無恃怙。心常憂惱。而自思惟。若父在者。哀
愍我等。能於危難。救護開悟。今捨我遠喪。自惟薄福。
不遭值故。悲感發中。即皆醒悟。尋索此藥。色香俱好。
即取服之。毒病皆愈。其父聞子悉已得差。尋便還歸。
令諸子等皆悉覩見。汝等寧有是事不。答言。有也。大
王。我等愚癡。誤飲毒藥。藥發悶亂。賴蒙父慈。更賜壽
命。善男子。於汝等意。云何。頗有人能說此良醫虛妄
罪不。不也。世尊。佛言。我亦如是。成佛已來。無量無邊
百千萬億那由他劫。為衆生故。以方便力。言當滅度。亦
無有能說我虛妄者。

わたれ人天大會も肝膽を摧く悲哀金容を秘して
沈海よりも深く傷哉恵日早沒して生
死の闇尚ほ晦し長夜の夢未だ醒めず拭涙
拭涙何ぞ已むを得ん仏在世のほんも不及唯尊像に向て淚を
流し〳〵わたりを遺跡を弔ふて魂を消すみの外
なし

○入涅槃之圖　第二十二巻竟

抑此梅檀の瑞像も昔優塡王の木像ぶいまやそれも
生身は如来なりしてきけり思しをなぞ

ゝう石窟荘厳も仏神〳〵悲慶莫全を
胸と分〳〵て大會よ告給ふく我世数劫辛苦
苦行おくく今立渇恵世ふ悌の出世稀曇花
よりも希也深く悩んだもうてく我父母
とみとて所より虚空よ上下注度
〳〵給ふ廿四返おはて七寶の床よ上ゐ頭ゐ
面西にして北首よ時よ阿娜律尊者大會よ告
給ふく世尊今ぞ入涅槃と大衆此語を聞て
或も悶絶〳〵我ゐ地よ仆ふ雲霞拝風ゐ戦慄と

爾〳〵其故如釋尊摩竭陀國にして三十成道
ありてよりも汚母摩耶夫人を爲に祇園精舍
より忉利天へのぼりて安居の會を結跏趺坐〳〵一夏九旬されあひだ摩訶
大報恩經を說き天は將釜無量無邊なり此時人間をしらく四部の弟子あまねく
見ざるをうらみけれ事〳〵たとへ是の中より
月ごろをへてげうぜんはやまをくだり
父母〳〵離をおもふがごとし時に按婆國の王

僧坊大王寺幕渇鉢作のおもう國中は巧匠を
召て栴檀香木をもつてくわしまの形像をほりく
尼志めもと次に技工をも白て言く我等小乃
相好をも模〳〵をもつて色〳〵光明威德をいう
てうつさ〳〵まつらん時小毘須羯磨
天をれはもつを身をかへて人の工となりて
に申て汚うけうをわませ工の中小家上
さう大王のそめにお像を彫りたてまつらん
やもと王おほせ成よ工ども香木を按

苻夏…て以て天道…よりてへりまはを。
吾、成仁者は吾未。とをの
吾容とうは…拳ら金…や時よ玉函斧
と執て吾未を破ら玉拝…三十三天ふ面…て
拝ま奉産う…開ゆ。松神力とをもて言へをよ
如不ま衆生開者とう…て罪垢煩悩悪消滅
珍…もむ珍…て不口ま端厳微妙へ仏像
や成行ぐ…時王浄信を生て柔順忠と比迩。
加ぐ一切所有の禁法悉消滅す

ろ事…ぺとを面ぐ日ま名ま雲霧をはぐ次うもて
…と。仏舎利并…菜造像功徳煙等に祝望。赤時
志尊物利天へ成舎ふ去…生ぐ…て七箇日をを已
て如来ま舟ふ開浮地黒儒伽ア風大池水へ似
よをさうぐ…やをふをのて帝天
自在天子ふ法もて。須弥山の頂より儒伽ア風
へ池ま通り…行ぐ…て金水精ま三ヶ
浴を作ぐもむ。松を執はう金へ満らくさう
行ぐ。侵壊を新ぐ造ら…ぺとを…ぺとを…ぺとあれ

り世尊の下たゝまり階の上に昇て座に坐し時に
世尊長跪合掌して雪像よりしりぞき座
を虚空に化作りて中に石の如き
も世尊坐像の頂を撫でく記と授て言く我
滅後一千年に汝女子あり汝よりて後
次て時に大王仏像をおいて言さく未仏の滅後
に仏像と造ん功徳を以や仏の
たまふ〳〵仏記をえて記すらく仏像と造る
者は十方の仏前に生まれん阿含経説仏三昧経

造像功徳経おの〳〵
ときに仏我涅槃後に
白て言く〳〵仏は遠て精舎に
又像を造〳〵
次〳〵て涅槃に入
の如き之
像をもて中座
而已に
仏像と造ん時に世尊も
仏像と二つ
仏像と造ん時に世尊も
仏像と二つ
仏像と造ん時に世尊も
仏像と二つ

霊像殿創立てよりこのかた年ふる
如来と姫周辺四の尊を昭王廿六年甲寅四月
八日に降誕あり。同第五代穆王十一年庚寅
の四月。如来世七歳の時。一説辛卯（世八歳）母摩耶夫人
御扈従仏刹天に昇り玉ひて像頂
を以掲像と造らせ給ひしかば
四尊聚帝建興四年丙子より丁巳に
至れり。一千三百七
年に星霜を経ぬ。実に風雨にうたれ霜雪
にうたれ。佛法と共に破滅して此霊像とも
失ひなんと歎き給ひし時よりも梵士あり姓は鳩摩名は
羅瑛と云ふ。岡寺提寺一名元興寺像をも
ふかく感じ給ひ。其霊像を東の方最且ゆうに
をおろして東の方最且ゆうに歌を書もち
す紀けもち羅瑛法師像を負事数年又
霊像羅瑛を松い行ふ道険難を経て
つゐにもとの門ふ恐ろしく厳をしてふ東
天竺の東玉舟の像なりし霊益国ふ将来ふ
此の国の主和純王大ふ喜て霊像をいふ

屋狹と雖も當て宮の内ふさぎて供養し
淨土かく西蕃廿餘國を化せ歸敎しまゐらせしの梅事かくのごとし。

第五の獨像靈異小光淨土より新根市東晉孝
武帝太元二年丁丑に當れり。
建元十三年丁丑にあたるこの年正月ふ
大史奏していはく。星孛て外國の分野より
入ゆきて大淵の宿んあて中國ふ入ぬ。

皆驚きいぶかり朕きさき西域ふ羅什法師と云
聖人ありや。是當ごの人ならんと。即呂光將軍ふ
命て。即呂光將軍ふ十萬の兵を與へ龜茲
を伐て靈像并に什公を奪とりて。十七年辛
酉とく吉元十一年丙戌ふ秦に向ふ。呂光とて小兩戌ふ
ふ秦にかへらんとて。吉年乙酉歲東晉の
孝武帝崩じ。長子の萬小幹位ふ即立
して後秦主姚萇小禪ぢて。又元姚泓長安と都として幸号
と白雀と改元す。次同二年丙戌ふ呂光將軍ふ向

朝なり。
又自立して明年
年号を大安と称して
晉穆十三年安帝隆安二年戊戌の歳
の姚萇う子姚興弘始三年戊戌ふたゝび
呂光より又姚興うたがふらく
なりし。羅什法師を招く。長安にて
十四ヶ年と有て
亥ハ呂姚興弘始十
十六年辛亥也。

八月廿日羅什入滅
もそうち子姚泓立
て廿十八年と有
劉裕と申一珍
と有ハ姚泓と
車を出すとうを
ありして云不圖
人も敗とうすめ
此座像や

龍光寺に安置せ。ゐ
云道生法師道樂雖と海を隔て歸來て廬阜せ
しかば。ゆくゆく仰ぎ慕ひて龍光寺と名つけ。ゐ
感得せる六ヶ年を經て東晉土王恭帝元
熙二年庚申に至て。陰裕東晉法臧と倶に
その地にて劉宋の高祖と称し。年号を永初
元年と改むるに及び。梁陳已
上四朝の間一百七十四年。江南の龍光ともに
隋文帝開皇九年己酉に至りて陳滅ぶ

小梁と号せり。ゐ
ふるに及び。ゐ
うそぶくと龍光寺ま
寫像を造くまもて長樂寺の道場にお置し
給ふ。隋の煬帝の時に及びて。ゐ
もて。ゐ
云ふ所の元を劫て花岡と立く。ゐ
とうばしまおかれ。ゐ
や。開皇十二年辛酉ふ又惠練と云沙門あて。ゐ

飛閣焼身養之圖

と焼身とを別に供養すべし。

唐の孝明皇后則天皇后ともいふ。第二の皇后なり。孝三の皇后高宗の継妃なり。高宗死せしかば、皇子弘を立てて帝とす。高宗崩御のち、皇后天下の政を執り、弘を廃して睿宗を立てて帝とす。睿宗また廃せられ、皇后みづから武后と号して帝となる。長安年中に長楽の道場を改めて大雲寺とす。毎月香油幡蓋を供養す。第七巻に具なり。

開元二年癸巳より同十九年庚午。

和にあらためて、年号をもとのごとく寺の額として海内に頒つ。

刺史江夏李邕小記あり。書もまた名あり。乃定武碑ともいふ。

梯とす。才十六の時武宗諱の字極めて武悪なり。舎畠五重乃至三寶とのたまひて一天を教導す。

乾元元年甲寅より寺塔一倍して、仏の尾しばしば出でて、仏ごとに金色なり。

乃て瑞応を表して、閻浮檀金の像を鋳造し、責時勝計を照破す。華厳両経の疏主なり。

異事多しといへども、ここに略す。

陵廬番花如舊禮教亦初とうも見取如。
五代の時の唐の莊宗長興三年壬辰。洛門
十明作就ラシ。初隋の
楊竹長樂の道場小
長興壬辰小至ク。三百卅十四ケ年ト理ス。
次五代の時の晉の高祖天福年中ニ始ラ
テ。大悲相李昇自立シテ南唐ト号次江都
ヨリ南昇州金陵の建業城ニうつシ
奉テ以長先寺小安置シテ贈礼儀ヲ

次小趙宋太祖。乾德二季甲子ヨリ李昇ヲ滅シ
唐の名ヲとゞめ。其後東都ヲ梁荒陳ヲ
街開寶寺の永安院ヨ遷ス。同二代乃
至太宗皇帝モし。先ハ禁中の滋福殿ヨ
初ラ太平興國ト改ラル西化門乃ほとり
今上皇帝一百万緡ヲ捨テ。ほとる江ヲ文あり。
ほとりそなへて啓聖禅院ヲ号シテ安ヲ
ヲ建テ月ヲ。礼敬尊崇勝計ヲ
次。○宋太宗啓聖禅院尊崇之圖

清涼寺の御本尊我朝日本國来迎の由来
人皇六十四代圓融院の御宇
永觀元年癸未八月一日に
孝二の位門左京皇帝
太平興國八年癸未

年の間所々にうつり行。隋の開皇九年
よりこゝに来る。代のはじめ普の代よりこゝに留りて。
蜀寺にうつりゐたりしが。代ごとに事三百餘國の
星霜をおくり給ふ。代ごとに帝王供養恭敬し
奉る事ひとかたならず。そもそも此人ありて江南は南岳
衡山の金陵に建業城より惡まり。長先寺より安
置に。趙宋に太祖乾德年中に僞唐の金
陵を破りて生捕て。法瑞僧を迎

て東京の梁苑城に左街開寶寺に永安院
小安しまして供養す。今上皇帝二代太宗迎ふ日嘗
滋福殿に於て毎日經供養し奉る。毎日の
法儀ふかく拜し奉りて今さてやうやうと望
ばかりをば申給ふ。かくて事終りぬ
ぬしらけり。育王の上足の弟子國等法師は
地藏院ふさはりて。つゐに此の傳記おなじく
當代寺物の事ども記しをへて。十二月
十九日小京よりまた東岡十一日に中の僧ふ皇帝

にさみ〳〵きの明年八雜樂元年甲寅也正
月中に宣旨をかうふりて京の大小の寺院を
唯礼して果〳〵ていとなみ奏聞していはく
掲像なし〳〵みたくやまひ人事風雲也と
まことに張幡首をうち人小垣て滋福殿を
内〳〵て瑞像拜礼をとけ人等かうし三月ふさりて
掲盛業法師一部をもて奏聞をもふ当帝を賜て
五臺山衆僧を請し雲の梯をかの山中に唯礼をとけ
ん法方の名跡を心ちつ

りふ進遊〳〵て東京よりかへ〳〵皇帝大よ喜然
う甚深き志を感〳〵給ひ迎〳〵時よを記て喜然
にをふ美〳〵てかへりく我事を心を
不思議の機縁をもて瑞像を拜見
事甚〳〵世にまれ懐かし仕て敢いくも此
霊像をうつし〳〵刻て日本國よ流しまつ
上一人より下万民小善縁を植しめむと
おもほす那きやう(なげき)
養ふ勲のまつさきを國〳〵

め〳〵て便尊像と円寂の
出〳〵まり故宮と改て精舎と称〳〵
さゝ語聖禅院と号〳〵鋼銭一百緡と施
て仏師光石西張挙とめ〳〵て役精舎よ
施てら〳〵〳〵造〳〵もゝ不日に事成りく
禍智園満〳〵妙相端厳なる事〳〵毘須羯
摩のごとく〳〵古仏よりもたう尚わたし。
主性等敬〳〵上下万民渇仰〳〵する事
詣るが〳〵此時未だ仏名を聞かず。

肩然弘済大師の号をたまはりし是よりおくる事
源幸特の事なり〳〵次に毘須羯磨天の化現
愛ふ法告げりて日我東土の衆生化度
縁あり〳〵在い海と渡〳〵救衆苦
よ注て群生を利益と海と渡〳〵救衆苦
つまもつ〳〵肩然愛の〳〵怪しき事
壮〳〵男智深と名て寿矣のわもと
の新仏仕像を拘と〳〵て番匠もて張業
仏よそう拘處ゆ〳〵ゆけりと〳〵

そき次うう模
和極よ毎かして一夜も泊にして
祈禱をとさしうんさんせ
取りけてさまこれみまよ和仲新仏とも
その産と当ろ多くそうはなかはる終
是別人力は及をなたりう秀代基深の
事や生きこれをこれ二ろ市牡事なし
基母を宮殿美おもおしろ感
筆う記録のう北おも二号相代終よ事

とはわさしうを次をもたし一
とかく次しう和生ふはうし数関
よ連陽も奇任をこと連ふありはうし数関
陽を松して張等う市北老新像と連を
く仏記ふもうせり。感等う私日記よ生成考
きく次をもて和尚の清源寺の年号の最光
鞘慶天北王北梅檀老掲像也うしへう。
山元松密大容易こ北と記おしへうもも
未代のそうふ北市や。老子得うしよ宝物集

小夢想事はかくのごとし。

太宗雍熙三季丙戌。台州の鄭仁德。うおきうと船よ便船して。貢ぎ物をもたらす。

六十五代花山院永記二年丙戌七月九日歸朝乃有奏上。大藏經五千四十八卷。小十六羅漢の繪像同時よわたり。仍而唐年おとして六十六代一條院永延元年丁亥二月十一日入洛あり。乃大極殿よおゐて北面して毎日一斗ゐ白飯と佳餚を設く。大門小野道風

臺寺小野ゐて。つゐ祖師の御面像をうつしたてまつる。其後は。肖像を安置したてまつる。

清涼寺ゐうつしたてまつる。

嵯峨ゐ。一宇の小堂をたてゝ。其内よ。釋迦堂と号け。清涼の靈宝を納め。

また。一宇よ。釋迦堂と号け。時の年七代三条院の御宇。長和五年丙辰三月十六日。入寂。

年七十歳。年ごろ相ともに。參詣を怠て。拙き筆の跡をも

の墓と清原寺をなつく天空源靈嶽山宮居
旦の五墓山ホの毛筋くの霊迹の七一坏をへて壇
をつき瑞像の厨子を安置ーそうおな
日本有験名高き無雙の瑞像なり上一人
と称下庶人よりそれをもて陽行のそれをも
もせて信敬をかう至誠ホ神をおもう事ホ
なる者や。

瑞像来朝の時豊後国垂水より志ゝくの運前

ひりまつふしぼくの人ともし庄り新恵僧
朝をに知識ホ受法へ。地下人見ホまぬ
人ホれを不思議ホ申ホしをれーまホ上
来をを日ゝホ供養ホ。琴瑞ありをもて満ま
請ホ来ホかくホをもひ。

人皇七十三代堀河院ホ宇に育月ホ至一
人より清育とかけく清原ホ居して
日夜称法ホ名号を唱て御養の法生ホ

雲孫ら亦幸にも病なき時ふ敢
為にむりしく事りて我窟
業は源空ふをもて一生も問育ふら。
ふりといへども又我窟福基厚ふしく山靈
地ふ添をもまし。十聖瑞像ふ安ふ云けしく
長して永遠ふ名号を唱ふ事ふ於ねふら。
ふもし和懐をもて一日怠ふそも
眼を云ふまじ也に等容を礼拝しまじへ
しともに祖つまし法ふ育て父さ

而眼忽ふしく事ふ於ふら。ふ為ふ
喜験倉仏の号ふ称ふ。欲知過去因見其現在果
もまし歌ふ未来果見其現在因ふ金言ふのさ
ふら者ふ。

八十代高倉院治承元年十一月ふ
法然人ふ高野ふ登ふ想ふ告ふり。ふて云。我国
さふ而天ふより一軸ふ下ふ百氏ふしまふ
上下万民ふしまふ法ふ帰して群集ふ雲ふ

はちくにして法名を和しみちの事
泥梨會主のそし毛小の名僧衆而の淨
侶激あり仏法を嗚く排しは法敵を離て仰
敬そまの風よひきしくやて而生我刘
釜ふ而をとてし新撰の陶ふ炎
独しけまはりや後よ又仏衆ひりて等
人衆よ死さそ免や而中て陶ふ仏而しと
作りをしはの全法しそ下は今年
時の応生ひりてう学解と存ん而つ

ふんやをふ法在ふ心法生すへきなり

午二代後馬射院御宇建久元年庚戌歳四禅
ふ武州の忌光寺ふ住給上来法師法人と次
をひて再興をせハ年を重て六十四代光深
院御宇建保五年丁丑ふりきねて英上ふ
ふの時ふ栃尾の明恵上人貴賜を勧をし
て造営ふ初ふ仏ふけて毛寺を建立をひの新
時七ヶ日の説法ありけるよ伊勢天照ふ神宮

八幡大菩薩をもして大小神祇諸
天善神もろもろを招請
り請よ春日大明神毎歳法華
已下悉く仏の前に
已に招現して勅請
勅をのたまはく毎日法華
かはるがはる毎日法華
靜遍僧都と申仏
の僧都とも申さ平相国清盛公のたまは

給の姓大伴氏紀伊国牟婁郡
きうて熊野権現をあがめ
ふかうして毎歳参詣
化儀を示めし八万四千の法門
四生の群類を度
行を修しおこたらず
身命を捨て十方
そこで我本誓
衰化して今此

わうさまのりとのたまふ。世間の父母をたづ
ね今生一世にかぎりなく。歎迹大師を多生劫
劫の慈悲。無縁菩提の友をそ
の恩を報じ父母を
ねんごろにとぶらひ。主君の父母に家名焼香を
いむや主実に父母を忘れぬるとも。ん
ぢんん人を一力そもとぶ。南無阿弥陀仏
くてたまふ。財宝珠玉

うまへ奉かせもいたし
山産おく献たまへし
貴賤上下男女猶豫あ
なれ支。亜墨大口右力
の人く奉かと言れ数日を経ていさぎよき衣を取さ小袖
ともお来て泊とかく逗留ありし間
をもてなす時よりもてい
かりとや侍へ伝考事。

毎年三月十九日年号の御朱印を
祢の元来寺安嘉門院と申まつりし後高倉院
の序女八十五代後堀川院
壹小田河女院と立生れ
をも妃にたまひ
は主上をはじめ雷電をはじ
め祈らせ安嘉門院の御
へつらはれ御母儀の生
嘉門院と称して
ふ

おかりめし給はりまも七ツ半の刻程に退出
いとおそみ給へりくて伏所を毋公生處と
ちゝ君を給へとて菊寺にありをとはもしう
年おけ中宮小祈禱のりけまいおそ蓋龍
の汁時愛おもへはきは威一給へりくき汝の
母は兄柳くちくと地獄よへおちてとも志の実の
志をもて柱くけ退福くなりてまつり
しうも特重報受して今ハ地獄をいてく
畜生乃小くく牛に生れ給へり技牛とそ

もりくれもくく明日早朝よ菊寺の西より村末を
元気て七疋乃牛ともおひ給へし毛中に黄牛
ふたりて黄支なるおひ牛あるを毛おまし
男汝の母なりをみ給へ夢想のあるさなり
給へとこうおひ牛ともおひ給ふれとそて西門ふて
牛ともおひ給へ若けはおくく黄なる
あるまてち伏ほくく菊寺の前に技牛を給へ
ち番をを創倉物をとりくく養給へ

に於ては又法をもつて
れても其の家業を果
そん身をもうしなう
まうまうとくなる間
たつねさの生
をまた枝末を引
解脱と云へ
ず枝末をのせら
葬送の儀式あり唯

驚くことあり生れ僅かに七日にして父の前
まこれあり三月十九日に及び半の死去の日也
三百年に及て此身拭ふ能はざる
しるべきなり

先代武藏守平朝臣泰時
氏の次男前相模守平朝臣時頼
最明寺と号す六十七代後嵯峨院御宇
寛元四年丙午に隱蘭渓宋朝より来

半ば後深草院御宇建長元年己酉ホ
いたりて辛元卯時頼豆州山建長禅寺をそ
て蘭渓和尚を請じて開山として次初宝治建長
学年間執権の主として四海を治ホ
給ひ世おだやかなり程なく遠
國の守護國司地頭
名主ありて人民
石姓となや悩もなく別門の法則をく
まて今に至る政をこ

おもて六年卅七年と改列されけり。あるは
道寺に一宿ありて。佛号を称て次第一遍と
うみ給ふに。数百戸帳をう北向室四廻子
とて給ふよ亜ふと。一人をれかくて
感嘆のあまりもめて。書置小給ひて
ありの古墳はせまけて。ふるまひ
君もわれをわすれ我をわすれ
中々に覚て夏ありめ書置小給ひて
向給ふ。真漢雑宝黄金百万字建

あり。又田畠山林ホ七ケ不字附きれて
より。毎年十二月廿二日忌日の佛
事一字不退特教令すめり。

大念佛執行之事。

一。掲像我朝之事。

事も人皇卅六代一條院の御宇永延元
年丁亥より以来。二百九十三年にあ
たて。人生九十代返宇多院御宇。弘仁
二年己卯三月六日ホもて先年あ

りて九十一代伏見院御宇、園覚上人ふ
勅して、迷悟善根の人をあつめ四衆の輩と
詣て、法会對院壬生地蔵堂にうつしたてまつりぬ
ひろふ処の如く有りといへども活眼の大忠
仏を招かんをもとめられよりて家消ん
那集門前市と成しかども退却する輩
ず。三月六日ふたたび開て同十四日ふたたび
拡開ば有縁の参詣長和五年丙辰三月
十六日終り。畢(けだし)亜日十箇日は上善ふ拠

てうちもの乳。應仁の一乱ようて本堂も棄
棄ル所ニ非ス。遷座
ケ年ふたたび退転すること四十
明十年戊戌再興し
當寺ノ霊寶もろ
とも大略紛失ぬ。一書云

一寫多羅葉法華壽量品

一飯石念珠貳百箇 勅大士造称伽陀時所持ら

一霊鷲山金剛寶座下石一片

一注師曰然家帝所賜佛像經本佛菩薩
曰王圖畫頌詩太繁多無而年代深遠而
階遺失見在若干記之云々
又云當寺の鎮守霊容龍山より涌起并契券未
藏干寺中一建久元年羅刹禄時皆林焼時ゝ
當寺無雙の宝霊柿舎利元由の事
九十七代後醍醐院重祚建武年中に天下
兵乱おこりし時征馬国の住人河越十郎

て天龍開山夢窓國師に宣旨ありて
紫衣を賜ふ國師固辞すること七ケ度に及ぶ
綸旨しきりなり相国寺の
師指を剪りて誓ひ
へども柿のさ紀(びやく)の全きを
や今を弥勒の
聖の前にそなへ
をは國師香爐の火は焼折りその灰
親王人れたまひしとは山陵

して顕密両宗の才一山より
智行並備の誉ありし
久しく山の流滴を
るにて亜ぐ天慶八
召請論場のかれ
宣旨に帰をもよほし
さ五にて長寧寺
いとめでかくも
寺に石仏を

かさね一鉢と松苑の朝夕風お清の姿
折しも穂不孤必有隣大明不藏光ありま
遥よ久代の座主の開師をして三聚浄戒
乃大祖より法勝寺中興岡山慈感和尚を
も申也此上人いまだ山つよれの時分時に
燈中に毛坂殿をまねく言く忽迎として
赤梅檀のかおり奥と窓りおれほつり
とて天王寺へ尚寺へと色徒共をそりて
尋ねとあるお當ちより上件の事に

返答次と申より其時上人不審とおも
折しめと仔細判

一百一代坂園融院の御宇康暦年中に
心寂上座へねわり紀綱より掲像の
弥中小陣に事に不審して漸よ
龕中に入手ぬかく佛の法定と探る忽
癩病を招て仔そはく次第
當ちて承仕仙秋へ

…生うたうしを生…
…また変換きゝ…
…う。應永廿二年…
…あり。時よ仙祐佛…
…とけれとも…
…容沢あり…も動…
…寿のうゝ…
…同所宇…尚寺…所小渕…

…お待けり。十四…
…て四月九日…
…よ…の…
…人…
…近…
…我釋迦堂の…
…物…
…ように…
…しみ…

…う。後若死…
…越中三山…
…婆…
…山城國葛野郡…
…通…
……
…飯田…
…飢渇の…
…死を…

城の釋迦堂へ参詣して、技藝より三四所巡りの才おれかしてて、小洞の通路うち上米一石宛、歩米二十四石ばかり、一名扶持、百味の飯食を頂て、法華講を執行ひ、大佛供養と称し、施物ありて書子に告ぐ。

けまを座ふう勢ひ、山陽寺物のおもしろきを、玄性兵忠の者にて立山より次をふ當寺にすゐう技家より勢をゆるして。書細小そ施主まけ新。書子そ絆のうえ引れ神祇みくをすく添。を新しかとて。いひまをたに平をそ取けれ其後小洞組人善光寺立山參詣をに又通路すみ技平により鬼堂を離すう事祇祀をく候をよ祈ふく

れ書し記すと雖も今に伝を
りて十月十四日をもて忌
な辞。

同州字當寺日奈久人。幸多年。
往生院に参禅上人と
と嗚呼にて日来ありて
極楽の新猶ほ他事に更ず。
我時来迎してト向ふとき西門に
く立ち往生の素懐を遂られり。
四才にして教を
記云ふ矯と。

初應仁元年丁亥五月
あく一天下の動乱大
月七日より落涙中一盡く
實幢寺景徳寺西禅寺
六十餘所。地下の在家三千余宇類火せ及

不動寺の二王門大堂多宝塔経堂
名社みな灰燼となり煙の中にそそりて和寺
の一和尚長賢法印ばかり不動護摩の生房
見禅師ばかり両人残れる大悲像と舁て中院の光
毫も行基菩薩と記せる其性事一
毛ものこさず此日晩景大雨車軸のごとく
にて猶炎もや滅ざる清涼栖霞の両
寺もうち揺ぬるこれら皆人力及ばざる
て焦土となりぬる地こそまことに霊亀年中
おもしろし廿人ばかり及て徐昇あけて安堵せり

應仁二年九月丹波勢近江中に乱入の時堂
舎佛閣并一家等すべて焼上ること数百
二王の門五大堂も焼けまうせる清
涼寺にも数百の軍勢乱入して既あやうくみえ
しかば安阿弥作の山伏六軀ばかりを
取出せしに如来の像ばかりは焼ざりけり愛ぬ
往古行基菩薩老僧となりて枝山伏姿をか

御くり被下候様よろしく
云々家来ども力おとし
山伏大よろこび大音拝と申して日傾上野て
けさきは忽ち海の命を奪ひ大ぜ
船よおとされもくし時けれしし打ちし
くし存在不定也ぞ思く幸来奉祭拝
当ふ身をとてすつぱ海へ投ものをや
品しるめ様と釜て等来とをつく
次を掃落をおし風次第うなぎて

御堂をたてう船うり幸り別屋ねようとく
行まは軍勢とて一人も船うりけること
よし旅人ふまうさり堂後を恵言の特の
れもしをを被下苦寺社参宮後
の拉現とて海しく弟利ぞ貴賤ともお
手代おて感参仍清源寺を安れ来たに
存在さり大火所焼時我此土安穏の金言
れもしなうを拝ろ行をてうりおさを
仍け新投家をも多年弘布当流仰の

ものより善よ此僧公平公葬ふりて大往
生ぜしめ玉ふ。

一百四代後花園院の諱宇。惟子讃たてて
殿心去あり。十九年より九十歳にて日
暮し。一期のうちひとつまゐらせ
て夏冬の五衣なし。一生按ずれば生や我時
はくもまれけれ。今生安楽菩提
よく人変ぬうへて文
は蓋ぬし。不如平拙

楽注生の素懐と善くう
う葬ふもの。不退往生。二尊院の禹楊
ひさし。松の枝よ縄を結
まて。水の枝さして西
おもしろく又大井河の手馬の別ふく八ち
せられ玉まゐらせ。
整文志ぜ生ける新の見つけく乱なり
松を書めさて注生時別ふるまで来
ひうう。順次生時ふ

ゆくゆく仏をねがふべし一万八千餘部演説
乃功徳ありて釈尊の京都へ入給ふ
極楽の上下ともに昭和とよせ
てどうあけの年人々ゆく
少も不安無く極楽の夜き所へ参詣
よう立ちて招請しまいらせ
流来のなりと説聞教導の法昭也と法人ハ
あへて生活誓生して又本覚のほう

遂ふ注生の霊祇を仕清幸の福祉を
主命奥羽ふ為多年功績を積し人也能も此
職業の死試除行ふ事もの奉事。

吉あるとき和年九月廿日ふ下総小野ふ神
祖の例ふ倣ふ遷あまた一夕白き浄衣きる
老人廣見ふ戸を扣く告曰余我滅後瑞像
を傷ふしてすら流布を救ふ心を用心して
やつ捨てまふ廣見大ふ驚て軍家の

郷一族一色殿の士卒を雇て守護しまて
国川ふ至ふ聖日治人風雪一け数歳
後未高橋村明の林間ふ集舎して円浅し
け数年ふ仏体を梅檀也尭を彫ふ
主願望ふ叶ふ事甚しく海又一人ふいく
ふ世紀をふ数の諸衆小濱ふ至ふ
定法人来治して群集ふ
若鉄量寺の法得ふ
遂ふ二人足駐ふ長ふ

まうさせ給ひ庭見を以て日本へ
とゞめ玉ひ牧州の礼を盡させ玉ひて勇けるよ
遥よそ[illegible]んなし。豪田是必至尚の出生なるへし
ゆゝしく感涙をもよほしけり。剰さへ法年人
共よ命ずと云しけれ事半ばにも
文明二年庚寅の春。洋教寺の長老夏安
座ましく庭見竜圭和尚を招き奉りし
賜像と遷したてまつらんよしを歎き申

如何と問あらせ給ふ長老不及是非
申答奉れも色を排暁より門を扣ふ
ためし文殿より使者をもつて
佛殿の第一尊像を遷したてまつるおゝし陶冶の
文明九年丁酉冬十一月天下靜謐して
此靈像と又蓋もふ事なりたまふや。
年号御光被換の刻夢想の告ありて

洋教寺の長老玉興上人と共に馬山の
なにがし寺に移らる。細工を以て紀年す
る。法主屋を陰地に設け、獨り坐して
瞑想に耽る。常に人の要想の門を啓く
大注生を受けふらう。此像をも
九尺餘に造り、紀年も亦しかり。今
洋を渡りて那覇に来る。名字
を志ぬをもて遂に孔注来の中心
法称し玉ふ。當時も小楚と一人共

泳あらう。

同郷宇嘗寺西の兼と一人共に石なりき。法
人異石と山の形とし名つけ又寺地石とも
つ梅也和尚とおうみ申す。御歳廿
乃と記よりいき同志二百餘人
さそれまして毎夜七十の業よ
歩感應むれしの時節を
をかく梅の木告て言く汝過去の悪因あ

なる間子細なくして存してそのところの地
とて金刀の大きさ小豆粒ほどにして純金なり
けるとおもく按ずるに梵語にて梅檀の香氣ある
江乃名よ此新り始て梅檀の香氣ある事を辨え
ず下ゆる事なり香氣消滅次第に腐朽せり
必復を除信心堅固ふして念仏をおこたらず
遂に八十三ふして往生の剋に紫雲靡空よ

西天東震日域傳來年期畧記

月氏住世次第周穆王十一年庚寅始而彫刻
今來至東晋第九主孝武帝太元十季乙酉
経一千三百七十六箇年
震旦歴年次第自東晋第九主孝武帝太
元十一年丙戌至趙宋第二主太宗雍熙三年
丙戌歴六百一年矣即王支那并一千九百七十
七ヶ年也本朝光隆自人皇六十六代一條院
御宇永延元年丁亥至永正十二乙亥歳

五百廿九ヶ年也。都合三国ニ千
五百六箇年。
自如来入滅周穆王五十三季壬申。至今年
乙亥二千四百六十四箇年也。般涅槃已前四十
三年瑞像刻彫也。

跋清涼寺縁起後

嵯峨清涼寺瑞像。永觀中東大寺斎然
和尚入宋時所舶載也。釋盛算著記一
篇。頗得其事實矣。今此縁起六巻。則撮
其要以為国風。加以圖繪。蓋以便覽者
也。然其書画倶為當時名家之真蹟。而
亦之所希覩也。及嘉永中
慎廟特命俾影寫之。以藏于蜜庫云。今
後摹一本以収奉于吾山。亦以為助業

之清玩耳。

安政乙卯之夏 增上寺六十五世 大僧正冠譽慧嚴記